

## 礼拝のしおり (2020年6月号)

～主の御前に一つにされて～

主は人の一步一步を定め  
御旨にかなう道を備えてくださる。  
人は倒れても、打ち捨てられるのではない。  
主がその手をとらえていてくださる。

( 詩編 37 編 23～24 節 )



からし種の黄色い花が満開です。

主の聖名を讃美いたします。

新型コロナウイルスの感染拡大の中で、高井戸教会も、3月から通常とは大きく異なる歩みをなすこととなり、いつしか3か月の時を過ごしてきました。

4月12日のイースター礼拝からは、牧師と長老を含めわずかな人数が礼拝堂に集うこととなり、多くの教会員の方々には、ご自宅で祈りを捧げていただくこととなりました。主イエス・キリストのご復活を覚えるイースターを、一緒になって祝うことができない。2020年のイースターは、まさに異例のものとなりました。

それから約1か月半が経ち、聖霊降臨の出来事を覚えるペンテコステの礼拝も、同じ状況の中で迎えることとなりました。これもまた異例のことです。

主イエス・キリストが天に昇られた後、主イエスが弟子たちに約束しておられた聖霊降臨の出来事が起こり、教会の歩みが始まりました。その最初の頃の歩みを、新約聖書の使徒言行録を通して、私たちは知ることができます。聖霊のお働きの中で、使徒たちは、主イエス・キリストの御名を伝えていきました。ペトロの説教を聞いて、一日に三千人もの人々が洗礼を受け、教会の仲間に加わる出来事も起こりました。教会を迫害していたパウロは、主イエス・キリストを信じる者となり、伝道者となって、各地に教会を生み出していきました。それらは、すべて聖霊のお働きの中でなされたものです。最初の頃の教会の歩みを思う時、俄かには信じがたいような使徒たちの活躍と目覚ましい出来事の数々を、私たちは思い起こすのです。

しかし、考えてみれば、彼らの歩みも、順風の中でなされたものではありませんでした。最初から逆風の中がありました。行く先々で迫害に遭い、使徒たちは何度も牢獄に捕らえられたりしました。そのような状況の中でなお、教会の歩みを、聖霊がお導きくださったのでした。

パウロがシラスやテモテと共にアジア州で伝道しようとして「聖霊から禁じられた」(使徒言行録16章6節)という出来事をも思い起こします。彼らの歩みも、彼ら自身の計画通りにはいかず、何度もその道が閉ざされるように行き詰まることがあったのでした。しかし、そのような中で、マケドニア州に進むことが示され、現在のヨーロッパへ福音がもたらされていくことになりました。使徒たちも、聖霊の導きの中で、一步一步進んで行ったのだと改めて思います。

6月中のいずれかの主日から、礼拝出席を望む方々に礼拝堂に集っていただけるよう考えています。その道が許されるならば、そうしたいと願います。しかし、もしその道が閉ざされたとしても、私たちが進むべき道を聖霊が示し、お導きくださることを信じて、一步一步進んでまいりましょう。みなさんお一人おひとりの日々、その歩みの上に、神ご自身であられる聖霊の助けとお支えがありますように、祈っています。

高井戸教会牧師 七條真明

## ◎6月7日以降の主日礼拝の予定

礼拝の予定	聖書・説教題	交読文	讃美歌 21
6月7日(日)	エレミヤ書 5章 20～25節 マタイ福音書 7章 6節 「真珠を豚に投げてはならない」	詩編 51編 12～21節	341, 504, 511, 26
6月14日(日)	エレミヤ書 29章 11～14節 マタイ福音書 7章 7～11節 「求めなさい。探しなさい。門をたたきなさい。」	詩編 1編	1, 132, 463, 27
6月21日(日)	箴言 24章 10～14節 マタイ福音書 7章 12節 「人にしてもらいたいことを人にしなさい」	詩編 8編	8, 497, 505, 28
6月28日(日)	申命記 30章 15～20節 マタイ福音書 7章 13～14節 「命に通じる門」	詩編 16編	3, 458, 461, 29

## ☆6月中の高井戸教会の礼拝、その他について（お読みください）

新型コロナウイルスの感染防止を考慮しつつ、6月の高井戸教会の礼拝、その他の諸集会については、以下のとおりといたします。

◎主日礼拝について…4月12日以降、主日における高井戸教会の礼拝堂では、牧師と近隣に住む係の長老等、数名だけで礼拝を捧げ、多くのみなさまには各自ご家庭で祈りを捧げてくださるようお願いしてきました。なお状況を見ながらではありますが、6月中のいずれかの主日から、礼拝出席を望む方には礼拝堂に集っていただく方向で検討しています。その場合には、その主日の前の週に、教会員の方々にはその旨連絡網でお伝えし、教会ホームページでもお知らせします。ただ、ご高齢の方をはじめ健康等の理由やその他それぞれのご事情からなお礼拝出席をためらわれる方がおありだと思います。その場合は、ぜひ無理がないようになさってください。より安全に集える時を待ちましょう。また、礼拝出席を希望される方も、当日、ご自身で体調をよく確認し、少しでも不安がある場合は、ご自宅で礼拝をお捧げくださるようお願いいたします。

なお、6月中も、感染のリスクを可能な限り抑える必要があることを考え、普段よりも全体の時間を短縮した形での礼拝とすることを継続します。司式は牧師が行い、讃美歌の伴奏はヒンプレーヤーを使用します。また、6月中の礼拝当番の奉仕は長老2名によって行われます。主日礼拝における説教の動画も、引き続き Youtube で見られるようにいたします。高井戸教会のホームページに説教動画の URL を掲載しますので、それをクリックしてご視聴ください。

◎子どもの教会、その他の諸集会について…6月中も引き続いて、主日礼拝以外の教会堂における集まりは行いません。子どもの教会の礼拝と分級、求道者会、聖書研究・祈祷会、家庭集会、週日聖書を学ぶ会、壮年会・婦人会・青年会の集まり、バイブル・クラス、その他の集会や委員会も中止となります。また、6月14日(日)の礼拝後に行われる6月定例長老会は、5月に引き続きメールのやり取りによって開催に代える予定です。

## 5月の礼拝説教から（\*5月10日の主日礼拝における説教の要約）

## 「澄んだ目で神に仕える」（マタイ6章19～24節） 牧師 七條真明

主イエスは、「山上の説教」において、私たちが主に従って生きる弟子の一人として、どのように生きたらよいのかをお教えてください。この地上に生きる私たちが、どこを見て生きたらよいのか、どこに視線を合わせて歩いていったらよいのかを、主が御言葉を通してお示しくくださるのです。

主イエスは、「あなたがたは地上に富を積んではならない」と言われます。地上における富は、価値が損なわれたり、盗まれて失うこともある。そのようなことがない天にこそ、富を積みなさい、と主イエスは言われます。そして、こうおっしゃるのです。「あなたの富のあるところに、あなたの心もあるのだ」。ここで「富」と訳されている言葉は、以前の口語訳聖書では「宝」と訳されていました。「あなたの宝のある所には、心もあるからである」。「宝」とは、それがあってこそその自分、それがなければ自分は生きられないとさえ思っているようなものだ、と言ってもよいでしょう。誰もが、そのような何かを持っているからこそ、私たちは生きることができるのでありましょう。

しかし、私たちが宝とするもの、宝として蓄えるものについて、時が過ぎて、しばしば経験することは、なぜそのようなものを、自分は宝としてあれほどまでに大切にしていたのだろうかという思いを抱くようになるということではないでしょうか。子どもの頃に大切にしていたおもちゃも、気に入っていた洋服もまたしかり。また、健康であることが自分の宝だと思っている人も、病気をしてその宝が失われてしまう経験をしたりします。何らかの才能や能力という宝も、年による衰えなどと共に失われてしまうこともあります。そして、やはりお金こそが宝だと思っても、いろいろなものに使ってしまっ、気が付けば手元からなくなってしまうという経験を、私たちの誰もがするのではないのでしょうか。

主イエスが、地上に富を積むな、天に富を積みなさい、と言われる時、私たちが地上に生きる場所での「富」、「宝」そのものを頭から否定されている訳ではないと思います。そうではなくて、自らの「富」、「宝」とするものを、何のために蓄え、また用いるのかということ、ここで問題にされ、私たちに問いかけておられるのではないのでしょうか。

それは、主イエスが、「体のともし火は目である」と言われて、22節から23節にかけて、目について語られることと深く関わります。私たちが何を見て、どこに視線を合わせて生きるのか、歩いていくのかということです。澄んだ目をもって生きること。それは、神を見る眼差しをもって生きることです。そうでなければ、私たち人間は、富に心を奪われ、それに囚われて生きるほかはない、と主はおっしゃるのです。

主イエスが、「山上の説教」の中で、祈りについて教えてくださっていることに心が留まります。祈るということは、見るべきものを見る目を持つということです。私たちは、今、この地上に生きて、天を見ることはできません。しかし、見ることはできない天に、私たちの父でいてくださる御方、神さまがおられる。そのことを、主イエスから教えていただいた者として祈る。その時、私たちは天を見るように、天に視線を合わせるのだと思います。

その時に見えてくるものがあります。それは、私たちが所有して、蓄えて、それを用いて日々を生きているもの、自分の富、自分の宝としているもの、それはお金であれ、共に生きる家族であれ、何かの才能や能力であれ、また心も体も、私たちの人生も、そして命そのものも、私たちの唯一の主人、私たちの天の父である神さまから、すべてを与えられて生きている。私たちは、それらすべてを与えられ、任されて、それらを用いて生きるように、生かされている存在なのです。そのことが見えてくるのです。

私たちが、本当に生きるべきところに生きるために、私たちには見えない天から救い主が来てくださいました。私たちの真実の富があるところとしての天を、共にしっかりと見上げて、地上で与えられた人生、そのすべてを生かして生きる私たちであることを、主が心から願ってくださいます。